

# 6つのEthicsで法律トラブルを未然に防ぐ (1ページ続き)

レベル2は、社会におけるルールの存在意義を意識する段階に成長していて、③まわりの空気を読みルールを守る、または④「善良であろう」という感覚でルールを守るといった判断基準を持っている。守るべき法律の存在には十分な意識が向けられているものの、ルールの目的や必要性までには考えが及んでいない。レベル1よりは法律トラブルは避けられるが、いざ訴訟に巻き込まれるとその理由・原因が理解できない傾向がある。

レベル3は、その人の内部から判断基準がうまれてくる段階で、社会におけるルールの目的を理解し、beyond lawの感覚で、倫理に則ってルールを意識できる段階となる。そのため、⑤ルールは社会全体のウェルビーイングを上げるものであり、そうでないルールは変えなければならないという意識がある。また、⑥それぞれ人には異なる価値観があり、その違いを理解しなければならず、異なる価値観を束ねるルールを作るには、人にはEthicsが大事と考える。これがコールバークの発達段階の最上レベルとなっている。このレベルに達すると、どのような法律問題があるかを認識でき、トラブルに巻き込まれたときのダメージの最小化を事前に図れることから、他の段階に属するリーダーよりも有効な予防法務ができてきているといえる。

コールバークの研究によると、この⑤や⑥まで到達する人は社会全体の10～15%にも満たないとされるが、この段階が、まさに企業リーダーに求められるレベルなのだ。

## 米国でEthical Leaderを目指す

コールバークの⑤や⑥といったEthical Leaderに達するには、企業の意思決定プロセスに影響するEthicsにはどのような価値観があるのかを把握しておく必要がある。日本語で倫理というと「自分がされて嫌なことは他人にするな」と簡単に解釈してしまう傾向がある。しかし、このような定義で

は、リーダーの意思決定の基準としては機能しない。米国においてリーダーが認識すべきEthicsは概ね6つ(Citizenship, Caring, Trustworthiness, Respect, Responsibility, Fairness)に分けられ、「会社の行動が、この6つの価値観を底上げするのかわからないのか」を見極めていくことがリーダーの責任となる。

私は「法律を弁護士のものだけにするのは勿体ない」と言いたいのだが、クライアントさんにこれを伝え切れていないことを反省している。本稿のテーマであるEthicsは、予防法務に影響する話だけではなく、皆さんのリーダー力にも繋がるコンセプトなのである。

私は米国のリーダーとは、人を「inspireする(奮い立たせる)」ことができる人だと考える。こうしたリーダーは異なる意見を調整し、説得力のある考えを示すことができるが、これは人よりも成長したEthicsがあるからこそできる技なのだ。そして、人よりも成長したEthicsを身につける最善の方法とは、法律問題に触れることだ。正義感覚が不安定で法律が変わる、それによって新しい法律問題が起きるといった米国以上に、「Ethicsとはなんぞや」を学べる場所があるのだろうか？ 企業のリーダーの皆さんには、是非米国にいる間に、コールバークの道徳性発達理論の最終段階となる10～15%の感覚を磨いてもらいのである。

人をinspireし、強いリーダーシップを育てて、予防法務の最大の武器としてもらいたい。

※同講演会の動画及び資料は[商工会HP会員専用ページ](#)にて期間限定で公開中です。

内藤博久(準会員) 100年の歴史を有する米国の法律事務所Moses & Singer LLPにて労働法、企業法務、知的財産権などを専門に扱うニューヨーク州・テキサス州弁護士。幅広いネットワークで米国の大手法律事務所と提携し、日本企業の米国進出を多角的に支援。日本人経営者を対象としたリーガルセンスを磨くセミナーを実施し、YouTubeの配信なども行っている。



・Email: [hnauto@mosessinger.com](mailto:hnauto@mosessinger.com) ・YouTubeチャンネル ・久ラジ  
・US LEGAL AID FOR LEADERS ・ヘタウマ英語: [第1回](#)・[第2回](#)・[第3回](#) ・[個人ブログ](#)

# 駐妻のヒューストン日記 第215回 星加圭さん

2017年7月、ハリケーンハーヴィーが大きな爪痕を残したヒューストンに、復旧第1号の飛行機で1歳半の娘を抱いて降り立ったのが私の駐在生活の始まりだった。まだ信号機が停電している道路は地図上でもあちこち冠水しており、見知らぬ土地での生活の始まりは、1ヶ月ぶりに夫に会った安心感とフライトを終えた高揚感を超えて、余りある不安が漂っていた。

渡米して2週間、ようやく時差ボケも治り始めた頃に娘が熱を出した。子供のことから疲れに風邪が重なったかと思っていたが、特徴的な症状で川崎病と診断されて大きな病院に移った。移送された病院には、診断を下して下さった小児科医のように日本語に堪能な医師はおらず、こちらが理解している体でナースは滔滔と説明していく。早口で専門用語だらけの医療英語の中に放り込まれてしまった。

病室での付き添いに疲れ果て気分転換を求め、まだ自分のクレジットカードも持っていない私は、夫に1ドル札を貰って病院一階の自動販売機に行った。アメリカ生活に慣れた皆様のご想像の通り、1ドル札は壊れた販売機に飲み込まれてしまった。うんともすんとも言わない販売機を前に、丁度同じトラブルに見舞われた数ヶ月前の事を思い出す。故障の際にはこちらと書かれた電話番号にかけると、オペレーターが丁寧に詫言、後日自宅に書留が届いた。しかしそれができたのは、日本国内で日本語だったから。英語で電話しようにも、まずはハロー、その後は？そもそも自分の住所すら暗記していないのだ。

グレゴール・ザムザは目が覚めると毒虫になっていたが、私は海を越えたらそれまで自在に操っていた言葉を失ってしまった。ナースの投薬指示を勘違いしたまま付添ベッドで眠って、夜中に間違いを叱られた後には枕

を濡らした。退院した娘とは家の中で過ごした。エレベーターの中で話しかけられても、取り繕って逃げるように降りる。アパートメントに戻っても自宅で起きた事をコンシェルジュに伝える術なく、電球は切れたままドアノブは外れたまま放っておいた。

ペーパードライバー歴10年を返上して夫に運転の練習に付き合ってもらい、何とかI-10の下道を走れるようになった頃、家から3ブロック先の教会にESLクラスがある事を知った。子供も預けられるし日本の人も多くいるとあって秋に重い腰を上げた。教会の中を所在無げに歩いている私に声をかけて下さったのがたまたま夫と同じ会社の方の奥様で、その方の紹介で年の近い子供のいる友達もできた。水面に浮かび上がって呼吸をしたような心持ちだった。

病気も無事完治した娘を連れて近場の店を散策するようになると、私は言いたい事を翻訳したスマホの画面をそのまま見せる図太さを手に入れた。ある程度意思疎通ができれば、後はテキサンの親切さに乗っかって何とかなってしまう。それを繰り返していると完璧に話さなければという焦燥感は消えた。スモールトークも単語だけ聞き取れたら内容を推測して答えたり、たまに相手に変な顔をされて失敗したなあと1人反省したり、毒虫ザムザが変容した体でどこかいい回り方を覚えたように模索した。

こんな幕開けだったヒューストン生活も、あっという間に五年が過ぎた。駐在仲間も増え改めて周りを見ると、それぞれに充実した生活を送っている。ボランティア活動、勉強、新しい趣味、コレクション、楽しみ方はそれぞれだ。私自身も、クルーズや異文化の方々との交流などの楽しみも日本にいたら踏み出せなかっただろうし、抱っこ紐に収まる乳児だった娘はすっかりバイリンガル小学生になって毎日を楽しんでいる。私はこの、ほどほどに挑戦し、ほどほどに冒険する生活に概ね満足している。

